

聴け！これがテノールだ！

黒田恭一

オペラの、テノールによってうたわれる若い登場人物はみんな、愛する人を思って熱い血を滾らせている。彼の胸のうちで沸騰する情熱を実感させ、ききての心を熱くすることができるのが真のテノールである。かりに、至難とされている高いCの音を立派にきかせられても、恋する若者の胸で熱く燃える情熱を伝えられなければ、真のテノールとはいえない。テノールというと、誰もが高い声の輝きのみを云々するが、高い声の背負っている激情を真実なものと感じさせられることができるかどうかは、ひとえに、彼の中ほどの、ないしは低い方の声の、力と張りと艶にかかっている。

米澤傑のきかせてくれる高い声は、さながら情熱そのものが光り輝いて直進してくるかのように感じられて、ききてをどきどきさせずにおかない。しかし、その高い声の伝えうる情熱とて、完璧にコントロールされた中音域の強靭さがあることである。このアルバムに耳をすませば、その両者が理想的にバランスして、彼の歌唱が真の説得力を獲得していることに気づくに違いない。テノールのうたいあげる情熱がいかに純粹で、ひたむきで、熱いかを実感したかったら、米澤傑の声と歌唱に真摯に耳をすますにかぎる。

まさにこれがテノールである。天から授かった珠玉の喉を磨きに磨いて、その声を本物のテノールのものにした米澤傑のうたうのをきくききての感じるのは、一級のテノールをきいたときだけに味わえる、あの至福の瞬間である。